

マッチ売りの少女

クリスマスイブの日に雪が降っていました。薄着の小さな女の子が裸足のまま通りでマッチを売り歩いていました。「マッチ、マッチはいりませんか？」町の人々はクリスマスの準備で忙しそうで、誰も彼女を相手にしませんでした。女の子は寒くてお腹もペコペコでした。けれど、家に帰ることができません。マッチが一本も売れていなかったからです。

夜になると、女の子は寒さで体がガタガタ震え、もう歩くことができずに角のところで座りました。手に持っているマッチをシュッと壁に擦りました。暗い夜の中、その炎はとても暖かく、まるでストーブのようでした。両足を温めようとしたのですが、炎はすぐ消えてしまいました。彼女はまたマッチを擦りました。炎の中に、大きなテーブルに美味しそうな食べ物がたくさん置いてあるのが見えました。いい匂いがするガチョウの丸焼きもありました。けれど、マッチが消えた途端に、これらの食べ物も消えてしまいました。それで彼女はもう一本マッチを擦りました。今度は炎の中に大きな美しいクリスマスツリーが現れました。彼女はマッチを擦り続けました。最後には、炎の中になんと自分を一番可愛がってくれたおばあちゃんが見えました。「おばあちゃん、お願い、あたしも一緒に連れて行って。」おばあちゃんは手を伸ばして彼女を抱いて一緒に天に昇っていきました…。

朝、人々は角のところに座ったままの女の子を見つけました。周りにマッチの燃えさしが沢山ありました。女の子は顔に微笑みを浮かべて、もうこの世を去っていました。